

## 業績一覧

近藤 泰弘（こんどう やすひろ）

### ○略歴

- 1973年 3 月 県立岐阜高等学校卒業
- 1973年 4 月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1977年 3 月 東京大学文学部第 3 類国語国文学専修課程卒業
- 1977年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程進学
- 1979年 3 月 同（修士課程）修了
- 1979年 4 月 東京大学文学部助手
- 1982年 4 月 日本女子大学文学部専任講師
- 1987年 4 月 日本女子大学文学部助教授
- 1991年 4 月 青山学院大学文学部助教授
- 2009年 9 月 国立国語研究所客員教授（2014年 3 月まで）
- 2016年 4 月 青山学院大学図書館長（2019年 3 月まで）
- 1998年 4 月 青山学院大学教授（2023年 3 月まで）

### ○著作等目録

#### ①博士論文

1. 2003年 2 月、日本語記述文法の理論、博士（文学）、名古屋大学。

#### ②著書（表紙奥付等に氏名が記載されているもの）

1. 1985年11月、音訓篇立索引、共著（山口明穂・近藤泰弘・金水敏・古田啓）、汲古書院、570p.
2. 2000年12月、日本語記述文法の理論、単著、ひつじ書房、651p.
3. 2004年 4 月、コーパスに基づく言語研究一文法化を中心に、共著（秋元実治・尾形こづえ・遠藤光暁・近藤泰弘・Traugott, Elizabeth Closs）、ひつじ書房、164p.
4. 2019年 3 月、コーパスと辞書（伝康晴・荻野綱男編）、pp.82-110（担当）、朝倉書店

#### ③著書分担執筆（表紙等に氏名が記載されていないが、分担執筆したもの）

1. 1980年 2 月、高山寺古訓点資料第 1（高山寺典籍文書総合調査団編）、東京大学出版会、「史記」担当、共著

2. 1989年3月 日本語史（沖森卓也編）、桜楓社、「文法史・待遇表現史」pp.79-104
3. 1991年1月、An Introductory Bibliography for Japanese Studies Vol.VII Part.2, Humanities 1987-1988、国際交流基金、Japanese Linguistics担当、共著
4. 1991年2月、資料日本語史（沖森卓也編）、桜楓社、「解説編」共著、pp.139-276
5. 1993年1月、An Introductory Bibliography for Japanese Studies Vol. VIII Part.2, Humanities 1989-1990、国際交流基金、Japanese Linguistics担当、共著
6. 1995年5月、随心院聖教類の研究（随心院聖教類総合調査団編）、汲古書院、共著
7. 1995年9月、概説日本語学（林巨樹編）、明治書院、「文法1品詞論・敬語論」、pp.157-176
8. 1995年12月、An Introductory Bibliography for Japanese Studies Vol.IX Part2, Humanities 1991-1992、国際交流基金、Japanese Linguistics担当、共著
9. 1996年1月、言語学大辞典術語編（亀井孝他編）、三省堂、「国文法」他、
10. 1996年2月、国語学研究文献索引国語史編（国語学会編）、企画編集担当、共著
11. 1998年1月 An Introductory Bibliography for Japanese Studies Vol.X Part 2, Humanities 1993—94、国際交流基金、Japanese Linguistics担当、共著
12. An Introductory Bibliography for Japanese Studies Vol.XI Part 2, Humanities 1995—96、国際交流基金、Japanese Linguistics担当、共著
13. 2003年2月、テニハ秘伝の研究（テニハ秘伝研究会編）、「テニハ概念の構築」担当、勉誠出版、pp.39-48、単著
14. 2003年8月、高山寺古訓点資料4（高山寺典籍文書総合調査団編）、「秘密曼荼羅十住心論」担当、共著
15. 2011年3月、国語国文学研究の成立（長島弘明編）、「国語学の成立」「文法研究の近代化」担当、朝倉書店、pp.171-193、単著

#### ④編書・編著書

1. 2004年5月、日本語あれこれ辞典、共編著（荻野綱男・近藤泰弘・杉戸清樹・高木展郎編）、明治書院、企画編集、348p
2. 2005年3月、新訂日本語の歴史、共編著（近藤泰弘・月本雅幸編）、放送大学教育振興会、企画編集と一部執筆219p、
3. 2015年11月 コーパスと日本語史研究、共編著（近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編）、ひつじ書房、企画編集と一部執筆、312p.
4. 2022年3月、敬語の文法と語用論、開拓社、共編（近藤泰弘・澤田淳編）、企画編集と一部執筆、434p.

⑤査読付き論文（注のないものは単著）

1. 1979年12月、構文上より見た係助詞「なむ」-「なむ」と「ぞ-や」との比較、国語と国文学 56（12）pp.37-49
2. 1980年10月、助詞「を」の分類—上代、国語と国文学 57（10）pp.51-66
3. 1981年 5 月、中古語の準体構造について、国語と国文学 58（5）pp.18-31
4. 1981年11月、承暦本金光明最勝王経音義の以呂波歌について：音図と色葉歌との交渉、訓点語と訓点資料（66）pp.19-40
5. 1982年 1 月、（書評）山口亮二著「古代接統法の研究」、国語と国文学 59（1）pp.71-76
6. 1986年 6 月、（展望）文法（史的研究）、国語学 145 pp.24-32
7. 1987年 6 月、類書の利用の一形態—高山寺本逸名類書を中心に、国語と国文学 64（6）pp.48-61
8. 1989年10月、高山寺本逸名類書（解題と翻字）、訓点語と訓点資料（82）pp.37-56
9. 1990年12月、（書評）「仮名文の原理」小松英雄、国語学（163）pp.33-40
10. 1992年 3 月、仁明天皇四十宝算賀興福寺大法師等長歌について、訓点語と訓点資料（88）pp.133-146
11. 1992年 9 月、文法研究と電子化テキスト、国語学（170）pp.123-128
12. 1997年 9 月、「の」「こと」による名詞節の性質—能格性の観点から、国語学（190）pp.132-142
13. 1999年 3 月、中古語のレ系指示詞の性格—能格性の観点から（特集 国語史研究の方向）、国語学（196）pp.40-49
14. 2000年11月、《文化資源》としてのデジタルテキスト—国語学と国文学の共通の課題として（《文化資源》としての国文学）、国語と国文学 77（11）pp.127-139
15. 2001年 9 月、名詞節と項構造、日本語文法 1（1）pp.41-52
16. 2001年10月、N-gramの手法による言語テキストの分析方法—現代語対話表現の自動抽出に及ぶ、近藤泰弘・近藤みゆき、漢字文献情報処理研究（2）pp.50-55、共著
17. 2003年 9 月、語彙体系化の試み—古典語コーパスを用いて、語彙研究（1）pp. 99-109
18. 2004年 7 月、（展望）総説（2002年・2003年における日本語学界の展望）、国語学 55（3）pp.1-4
19. 2005年10月、自然言語処理と文献学研究—日本語研究を中心に、漢字文献情報処理研究（6）pp.96-101
20. 2005年11月、平安時代語の副詞節の節連鎖構造について、国語と国文学 82（11）

pp.114-124

21. 2007年11月、平安時代語の接続助詞「て」の機能、國學院雜誌 108 (11)  
pp.174-183
22. 2011年 9 月、平安時代の漢文訓読語の分類、訓点語と訓点資料 127 pp.120-131
23. 2011年11月、日本語通時コーパスの設計について、人文科学とコンピュータ  
(情報処理学会) 2011 ( 5 ) pp.1-3
24. 2012年 4 月、(書評) 田窪行則著、『日本語の構造-推論と知識管理-』、日本語  
の研究 8 ( 2 ) pp.64-69
25. 2012年 2 月、平安時代語の接続助詞「て」の様相、国語と国文学 89 ( 2 )  
pp.49-60
26. 2013年、(書評) 天野みどり著『日本語構文の意味と類推拡張』、日本語文法  
13 ( 1 ) pp.121-131
27. 2014年 3 月、古典語における「言語リソース」の問題について、語彙研究 (11)  
pp.10-17
28. 2015年12月、(書評) 高山道代著、『平安期日本語の主体表現と客体表現』、  
日本語の研究 11 ( 4 ) pp.75-82
29. 2016年 5 月、平安時代日本語における時間を表す名詞：「時相名詞」の提案  
と分類、国語と国文学 93 ( 5 ) pp.17-28
30. 2022年 8 月、明治元訳新約聖書の諸本の系統と文体、国語と国文学99 ( 8 )、  
pp.3-20

⑥査読なし論文(注のないものは単著)

1. 1980年 2 月、高山寺本史記殷本紀・周本紀の訓点における「の」「が」の用法、  
高山寺資料叢書・古訓点資料第一(東京大学出版会)
2. 1980年12月、高山寺蔵本草関係資料について、高山寺資料叢書・古典籍纂集  
(東京大学出版会)
3. 1980年12月、高山寺本香葉抄一帖、高山寺資料叢書・古典籍纂集(東京大学  
出版会)
4. 1982年12月、副助詞の体系：現代語、日本女子大学紀要文学部32 pp.27-38
5. 1984年 2 月、法三宮真寂の梵漢相对抄について、国文目白 (23)
6. 1984年 9 月、用言の敬語法、研究資料日本文法 3 (明治書院)
7. 1984年11月、コンピュータと古代日本語研究、ユリイカ16 (12) pp.82-89
8. 1985年 3 月、補助動詞「てゆく」「てくる」の用法：＜視点の補助動詞＞研  
究序説、日本女子大学紀要文学部34 pp.25-34
9. 1986年 2 月、日本語の人称の性格について、日本女子大学紀要文学部36  
pp.45-51

10. 1986年2月、〈結び〉の用言の構文的性格、日本語学 5（2） pp22-30
11. 1986年2月、主観表現の体系、国文目白（25）、
12. 1986年2月、書評・橋本不美夫、後藤祥子著『袖中抄の校本と研究』、国文目白（25）
13. 1986年3月、敬語の一特質、築島裕博士還暦記念国語学論集（明治書院）
14. 1986年10月、接続助詞「を」の発生、松村明教授古稀記念国語研究論集（明治書院）
15. 1986年12月、（展望）国語学（古代語）（昭和60年（自1月～至12月）国語国文学界の展望、文学語学（111） pp.39-46
16. 1987年3月、書評「平安時代和文の研究」竹内美智子、国語と国文学64（3） pp.66-69
17. 1987年3月、書評・奥津敬一郎他著『いわゆる日本語助詞の研究』、国文目白（26）
18. 1987年5月、古典語の疑問表現—「や」と「か」—、国文法講座（明治書院） 3
19. 1987年7月、日本語の主観的表現、財団法人新村出記念財団報（1）
20. 1987年12月、紹介・井上光貞監訳（原文・校異担当 林勉）『日本書紀』、国文目白（27）
21. 1988年2月、中古語の分裂文について、日本女子大学紀要文学部38 pp.1-10
22. 1989年1月、「竹取物語」から「伊勢物語」を引算する—機械可読な語彙集について、国文学解釈と鑑賞 54（1） pp.59-64
23. 1989年3月、ムード、講座日本語と日本語教育（明治書院） 4
24. 1990年2月、中古語のモダリティの助動詞の体系、日本女子大学紀要文学部 40 pp.39-49
25. 1990年2月、連体修飾語、別冊国文学・古典文法必携38
26. 1990年3月、構文的に見た指示詞の指示対象、日本語学 9（3） pp.31-38
27. 1991年10月、古典文法の立場から考えた検索とテキスト、日本語学 10 pp.104-114
28. 1992年3月、丁寧語のアスペクト的性格—中古語の「はべり」を中心に—、辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題（明治書院）
29. 1992年5月、中古語の形状性準体構造をめぐって、小林芳規博士退官記念国語学論集（汲古書院）
30. 1992年11月、レ系指示詞の意味論的性格、文化言語学—その提言と建設—（三省堂）
31. 1993年3月、日本語研究の立場から見た機械可読辞書について 特にCD-ROM辞書を中心に、青山インフォメーション・サイエンス 21（1） pp.3-10
32. 1993年3月、日本語辞書の機械可読化についての研究、青山インフォメーション

ン・サイエンス 21 (1) pp.3-10

33. 1993年1月、文法研究における大量言語データ —副助詞研究を例にして—、武蔵野文学 (40) pp.12-16
34. 1993年2月、推量表現の変遷、月刊言語 22 (2) pp.68-74
35. 1993年7月、古典語の文構造—格助詞から接続助詞への変化 (古代語文法を再考する<特集>)、国文学解釈と鑑賞 58 (7) pp.107-111
36. 1993年10月、日本語における異主語省略と能格性、国語研究 松村明教授喜寿記念論集 (明治書院)
37. 1994年10月、(書評)「古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析」鈴木泰著、国語と国文学 71 (10) pp.68-73
38. 1995年1月、川端善明の文法論の意味 (ことばと意味<特集>) — (意味研究の諸相)、国文学解釈と鑑賞 60 (1) pp.133-137
39. 1995年3月、総合研究所研究用ネットワークのあり方、青山学院大学総合研究所理工学研究センター研究叢書 17 pp.25-28
40. 1995年5月、中古語の副助詞の階層性について—現代語と比較して—、日本語の主題と取り立て (ひつじ書房)
41. 1997年5月、インターネットによる古典文法研究の現状、国語教室 (61) pp.24-25
42. 1997年7月、「文の構造」をどう扱うのか—古典語の複文構造の概観 (特集 古典文法教育の創造) —、国文学解釈と鑑賞 62 (7) pp.45-52
43. 1997年10月、否定と呼応する副詞について、日本語文法 体系と方法 (ひつじ書房)
44. 1998年2月、平安時代の「をば」の構文的特徴について—『源氏物語』の用例を中心に—、東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 (明治書院)
45. 1998年10月、接続助詞と準体句で考えるべき文法もある、國文學 43 (11) pp.85-89
46. 1999年4月、国立国語研究所創立50周年記念事業 見聞録、日本語科学 (5) pp.147-150
47. 2000年2月、原稿を推敲・校正する (電子メディア時代の文章法) — (ハイパーテキストのライティング術)、国文学 解釈と教材の研究 45 (3) pp.67-73
48. 2000年4月、文法研究とLinux (新・文法用語入門)、日本語学 19 (5) pp.153-156
49. 2000年9月、メディア時評 インターネットの変貌—メディアからリソースへ、文学 1 (5) pp.207-209
50. 2001年1月、古典語の統語法—「物語人称」を例として (特集 21世紀の日本語研究) —、国文学解釈と鑑賞 66 (1) pp.96-103

51. 2001年1月、インターセクション『電脳国文学』の世界—コンピュータによる国文学研究の今、源氏研究（6）pp.224-226
52. 2001年2月、記述文法の方角性—とりたて助詞の体系を例として（特集：文法への新しい視点）、国文学 解釈と教材の研究 46（2）pp.20-25
53. 2001年5月、国語表現史から見た敬意表現（特集 新世紀社会と敬意表現）、Science of humanity 32）pp.38-41
54. 2001年10月、コンピュータによる文学語学研究にできること：古典語の「内省」を求めて、文学語学171
55. 2001年12月、座談会・文学語学研究にコンピュータをどう生かすか、レポート笠間（42）、pp.1-37、共著
56. 2001年12月、Linuxによる言語処理—高速文字列検索を例として（特集 コンピュータによる日本語研究の新展開）、日本語学 20（13）pp.92-99
57. 2003年4月、古典語のコーパス（コーパス言語学）—（データとしてのコーパス）、日本語学 22（5）pp.62-81
58. 2004年11月、話し言葉の接続表現、月刊言語 33（11）84-85
59. 2005年5月、日本語の形態素の接続—用例による文法理論のために（特集：日本語の最前線）、国文学 解釈と教材の研究 50（5）pp.130-137
60. 2005年10月、平安時代の副詞節の節連鎖構造について（要旨）、日本語の研究 1（4）pp.118-119
61. 2006年4月、中古の文法 中古語の文法—アスペクトの副詞節を中心に（新・古文読解）一、日本語学 25（5）pp.160-166
62. 2006年4月、古今集「仮名序」と「文字」概念の構築（新・古文読解）一、日本語学 25（5）pp.34-40
63. 2007年2月、書評 鈴木一著『松下文法論の新研究』、國學院雑誌 108（2）pp.40-44
64. 2007年4月、言語学 E・カッシーラー『シンボル形式の哲学 第1巻 言語』（日本語学の読書案内—名著を読む）—（第2部分野別名著案内）、日本語学 26（5）pp.151-153
65. 2007年7月、インターネット時代の用例収集—検索エンジンの応用から日本語話し言葉コーパスまで（特集 インターネットと言語研究—情報を選び分け、活用するために）、月刊言語 36（7）pp.62-69
66. 2007年9月、日本語学の歴史（特集 日本語学とは何か）、日本語学 26（10）pp.6-12
67. 2008年6月、『敬語の指針』と敬語理論（特集『敬語の指針』を考える、日本語学 27（7）pp.38-43
68. 2008年9月、日本語日本文学研究的未来：博士課程の目指すもの、半藤英明、

- 揖斐高, 近藤泰弘, 鈴木元, 山田俊, 川平敏文共著、熊本県立大学大学院文学研究科論集 1 pp.3-47
69. 2009年10月、(書評空間) 鈴木泰著・古代日本語時間表現の形態論的研究、月刊言語 38 (10)
70. 2010年 5 月、平安時代の「飽く」「飽かず」の意味のメタファー的解釈、日本語学最前線 (研究叢書404・和泉書院)
71. 2011年12月、日本語通時コーパスの設計について、情報処理学会研究報告 (CD-ROM) 2011 (4) ROMBUNNO.CH-92, NO.5
72. 2012年 3 月、BCCWJ複合辞辞書について、青山語文 42 pp.10-15
73. 2012年10月、日本語通時コーパスの設計について、国語研プロジェクトレビュー 3 (2) pp.84-92
74. 2013年10月、電子化コーパスを用いた古典語のテンス・アスペクト研究 (特集 これからの古典語文法研究)、日本語学 32 (12) pp.16-29
75. 2014年12月、日本語モダリティの史的変遷、ひつじ意味論講座 3 pp.119-135
76. 2014年 3 月、歴史コーパスとは何か、日本語学 33 (14) pp.6-15
77. 2014年12月、古典語研究と「コーパス」、むらさき 51 pp.91-95
78. 2016年 4 月、古典語研究におけるコーパス検索と言語の構造との関係、国語語彙史の研究 (35) pp.1-14
79. 2019年 2 月、平安時代の敬語の形態論、日本語学 38 (2) pp.14-21
80. 2022年 3 月、敬語から見た日本語の種類、敬語の文法と語用論 (開拓社)、pp.2-16
81. 2022年 3 月、「意味の語形変化」をめぐって、国立国語研究所ことばの波止場 (11)
82. 2022年 6 月、書評 岸本恵実・白井純編『キリシタン語学入門』、日本漢字学会・学会通信漢字之窓 4 (1) pp.56-56
83. 2022年 6 月、「丁重語」について、日本語学41 (2) pp.42-43

⑦上記以外の学術業績

1. 1995年 1 月、一太郎V 6 for Windows (ジャストシステム編)、共編、ジャストシステム、ATOK監修委員として仮名漢字変換システムATOKの辞書を編纂・監修